

# ジェームズ一世の「説教家のための指令」と ジョン・ダンの説教

— ...he gave no satisfaction, or as some say spake as if himself were not so well satisfied. —

高 橋 正 平

## 序

1622年9月22日、ジョン・ダン (John Donne) はジェームズ一世 (King James I) が同年8月4日に公布した「説教家のための指令」(Directions for Preachers) を擁護する説教を行った。<sup>(1)</sup>「指令」は説教家に対して説教の内容を著しく制限したものであったが、ダンは王からの要請を受け、翌月セントポールズクロス (St. Paul's Cross) で「指令」を擁護する説教を行った。前年1621年にセント・ポール大聖堂の主席司祭に任命されたダンがジェームズ一世を支持する説教を行うことはさほど驚くことではない。ただ問題はその説教である。説教は聴衆に何ら満足を与えなかったし、ダン自身も満足していなかったかのような話し振りだったとの報告がある。ジェームズ一世を擁護するという説教家にとっては晴れ舞台ともいうべく説教でなぜダンは不評を招くような説教を行ったのか。この問題を解く鍵のは三つある。第一の鍵は「指令」を公布するに至った経緯、とりわけジェームズ一世の外交政策である。第二は、説教の後半である。最後にダン自身の説教家観である。本論ではダンの「指令」擁護説教を以上の三点から論じることによって「説教家のための指令」に対するダンの真意を解明していきたい。

年であった。何よりも王の頭痛の種は1618年に始まり4年目を迎えていた三十年戦争であった。ボヘミアの新選帝王フレデリック五世とオーストリアのフェルディナント二世との戦いはプロテスタントとカトリック教との戦いで、フレデリック五世はボヘミアから追放され、戦いはカトリック教会側の勝利に終わった。<sup>(2)</sup>問題はそれだけではない。敗北を喫したフレデリック五世はジェームズ一世の娘エリザベスの夫であったのである。同じプロテスタント国家としてジェームズ一世は娘婿フレデリック五世へ援助の手を差し伸べるだろうと誰もが期待していた。当時の人気詩人ジョン・ティーラー (John Taylor) は王にボヘミアへの軍隊派遣を促す詩を書いた程で<sup>(3)</sup>、援軍派遣は議会、聖職界、出版界の共通した認識であった。ところが議会は国内問題を審議するにとどまり、国外問題には手をつけなかった。ジェームズ一世は下院に宗教と外交問題に干渉することを禁じたが、下院は彼らの自由と特権は英国臣民の疑う余地のない生得権だと主張したために、王は議会を解散してしまった。更なる驚愕はジェームズ一世がカトリック教国スペインに接近し始めたことであった。ジェームズ一世は息子チャールズとスペイン王女との結婚を画策していたのである。その成功はスペインにフレデリック五世を復位させるであろうとの目論からであった。しかしイギリス国民からすればスペインは敵国である。ジェームズ一世の計画は国民感情を逆撫でにするようなものであった。時の駐英スペイン大使ゴンドマルは二人の結婚は可能性大で、フレデリック五世の復位はあるだろうと言ったが、それは一向に実現されず、多くのイギリス人はジェームズ一世はスペインにだまされたと思っていた。説教家のなかにも強硬にこの結婚問題に反対し、個人的にも公的にもスペイン王女との結婚に強い反対論を述べる者もいた。<sup>(4)</sup>聖職者からの批判を受け、ジェームズ一世は1620年3月にはフレデリック五世のために徳税徴収を認可し、聖職者にはフレデリック五世敗北を宗教問題として扱わないように指令を出した。ジェームズ一世は更に1620年12月と1621年7月には国家問題についての放縦発言に反対する布告を発し、ロンドンの聖職者はチャールズの結婚問題には触れないよう警告を受けていた。<sup>(5)</sup>ところがこの布告にも関わらず聖職者からのスペイン批判は続き、ロンドン塔に送られる者もいたが、王への批判が弱まることはなかった。それで

もジェームズ一世はチャールズのスเปน王女との結婚問題を厳しい官制のもとに置こうと試みた。最終的にジェームズ一世は1622年8月4日に「指令」を布告することになる。

ジェームズ一世が「指令」を発するまでの経緯は以上の通りであるが、対外的には大国スเปนとの絡みもあったが、ジェームズ一世は親スเปน的政策により国内外の問題を一気に解決しようと計画していた。このような内憂外患の時代にあつて説教家の立場は非常に微妙であつた。一般市民を相手にただ聖書の解釈を行い、王の機嫌に触れなければその地位は安泰であつた。しかし微妙な宗教上の問題や王に関わる問題を説教のテーマに選ぶことは説教家にとっては死活問題であつた。実際王が禁じていた外交問題に触れることによって、投獄された説教家の数は少なくはなかつた。特にチャールズとスเปน王女との結婚問題は説教家にとってはタブーであつた。ところがピューリタン説教家は相変わらずチャールズ王子の結婚を非難し続け、結婚反対のパンフレットや本が密かに出回つていた。ジェームズ一世が「指令」を公布したのは説教家に王の政策への勝手な干渉を禁じるためであつたが、その「指令」は以下の6点から成つていた。

第1条：説教家の聖書釈義方法についての制限が課され、説教家が扱う内容は39箇条と2巻の公認説教書に限定される。説教家は39箇条や公認説教書を通読し、熟読することを要求される。

第2条：日曜日と休日の午後に説教は禁止される。説教家は、日曜日と休日の午後には教義問答、主の祈り、使徒信経、モーセの十戒についてのみ説教が許可される。とりわけ子供達への教義問答と教義問答の項目解説に努めることが奨励される。

第3条：説教家は、運命予定説、神の選び、永罰、神の恩寵の普遍性、効能、抵抗、不可抗力のような難解な点については説教ができず、それらは学識者に任せられる。

第4条：説教家は、君主の権力、特権、支配権、権限、義務あるいは国家問題や君主と民衆との関係に干渉できず、「信仰と良き生活」の二項目にだけ説教が

できる。

第5条：カトリック教徒やピューリタンへの非難や下品な罵倒は禁止される。

第6条：説教家は、大主教や主教から認可を受けなければ説教を行えない。司法官、役人、代理主教は説教家に認可を与えることができず、説教家は特別権限委員会から認可を与えられる。しかもその認可には主教や主教管区からの推薦が必要でカンタベリー大主教からの認可とイギリス国璽の下の承認が必要である。この指令に違反する場合は主教により役職停止の処分を受け、主教が処分不履行の場合は管区の大主教によって一年と一日職務停止を受ける。最終的な処罰はジェームズ一世自身が定める。

「指令」は、以上のように説教家に対する説教内容の制限、日曜日午後の説教禁止、教義問答の奨励、複雑な教義取り扱い禁止、絶対王権への介入禁止、カトリック教徒とピューリタンへの非難禁止と説教家へ厳しい認可から成る。この「指令」は純粹に宗教的動機から生じたものであるというがむしろ政治的色彩が強く、それは国家の言論規制であるといってもよい。現在のようなマスコミ機関が存在しない時代に説教家は一般大衆にとっては重要な情報源であったが、王は国内外における自らの政策への批判を恐れて、説教家の自由な発言を封じ込める作戦に打って出た。「指令」により更なる絶対王政の強化を図り、ジェームズ一世王朝の安泰を目指したのである。「指令」公布後ジェームズ一世は「指令」を一般大衆に対して説明し、擁護してくれる説教家を必要としたが、その大役を託されたのがダンであった。ダン50才のときである。ダンの説教はどのようなものであったのか。

## 2

ダンが「説教家のための指令」擁護に際し選んだ聖書の本文は旧約聖書の「士師記」5章20節 "They fought from heaven; The stars in their courses fought against Sisera." (もろもろの星は天から戦いに加わり、その軌道からシセラと戦った。) であった。ダンは説教を二部に分け、前半では本文の「解釈」を行

い、後半で聖書本文の「説教」への「適応」を試みる。聴衆はいかにしてダンがジェームズ一世の「指令」を擁護するかに興味を抱いたに違いないが、ダンにはやる聴衆の気持ちをおさえるように本文の解釈を行う。説教方法としては当時の説教方法を踏襲したものである。「特別な事態のための説教」では説教家は最初に説教の解釈、次ぎにそれを「特別な事態」に適応するのが普通であった。それではダンの聖書本文の解釈はいかなる解釈であるのか。

「士師記」はイスラエル人のカナン征服記である。イスラエル人は度重なる主の前での悪により主はイスラエル人をカナンの王ヤビンの手に売り渡し、イスラエル人は20年間ヤビンの圧政の下にあった。しかし女予言者デボラが立ち上がり、主の言葉によりイスラエル人軍を激励し、カナン軍の將軍シセラを倒すに至る。イスラエル人は主から見放されたように思えるが、主は最後にはイスラエル人を助け、カナン征服を可能にする。この5章20節はそのような主からの援助によりイスラエル人がカナン軍將軍、シセラを倒した記念にデボラが歌う歌の一節である。この歌の解釈は以下の5点に要約される。

- (1) 神は時間をかけるが最後には神を信じる者に神は援助の手を差し伸べる。
- (2) 神ではなくヤエルがイスラエル人の敵のヤビンを殺害した。
- (3) 自ら進んで神の援助をすることが必要である。
- (4) 自発的な神の援助者は永遠に聖書にその名を留められ、逆に神への援助を怠る者は神から非難を受ける。
- (5) 人は神の见えないところに行くことはできず、神はいかなることをも見ており、神を援助した者には絶えず神からの報いがある。<sup>(6)</sup>

説教の前半の目的は、神が自らの仕事を怠るのではないかとの人々の心配と疑いを取り除き、あらゆる点において神の大義と栄光を援助したいという気持ちを人々の間に促すことである。<sup>(7)</sup>神は人々を忘れていたようであるが、決してそうではなく、いずれは援助の手を差し伸べてくれる。これはカナンを征服するイスラエル人への神の対応にはっきりと見られる。イスラエル人の神への悪

にもかかわらず神はイスラエル人を完全に見捨てることはせず、最終的にはイスラエル人に勝利を与えた。ダンは「神は時間をかけるが多くのことを行う」<sup>(8)</sup>と再三このことに言及する。神が時間をかけたが多くを成し遂げた格好の例がヤエルによるシセラ殺害である。人々は神の即座の行動を期待するが、神はそうはしないので、人々は神への不信感を強める。しかし、神はいずれは神を信ずる人達のために立ち上がり、助けてくれる。シセラ殺害で最も驚くべきことは、シセラ殺害を行うのは神ではなく、名もない女性ヤエルであるということである。神は直接自らの手を下すことはせず、いわば第三者ヤエルが神の代理としてシセラを殺害する。これは何を意味しているのか。ダンは「神はほとんど人を使わないで多くのことを行う」<sup>(9)</sup>と言うが、神は必ずしも大軍をもって行動するとは限らない。シセラはイスラエル人との戦いで敗走し、砂漠に住むヤエルの天幕に隠れるが、ヤエルは熟睡しているシセラのこめかみにくぎ打ち、彼を殺害する。それを祝福したデボラとバラクの歌は何を伝えたかったのか。それは神の力と目的を信じようとしないうイスラエル人に神が「弱く予期せぬ手段」によって与えた驚くべき救出である。<sup>(10)</sup>イスラエル人は神への反逆と懇願を繰り返し続け、カナン征服へ至る。ダンが「士師記」5章20節の解釈で言いたかったことは、神の意志、意図の成就には名もない無力な人の援助があって初めて可能になるということであり、それを示してくれたのがヤエルによるシセラ殺害であった。ダンがとりわけ強調したかったのは神は直接手を下さなくても「弱い手段」により大きな仕事を行うということである。<sup>(11)</sup>神は「完全に、直ちに、驚くほどに、奇跡的に、自ら」その目的を果たすが、しかし、神は援助を求めることもある。シセラ殺害の場合はヤエルが自発的にシセラを殺害したが、自ら進んで神の目的達成への援助者となる人に対して神はその報いとして聖書にその名を記録される栄光を与えてくれる。<sup>(12)</sup>だから神に対しては進んで援助の手を差し伸べよ、と言うのである。<sup>(13)</sup>神の意志に先んじて、神を援助する者はデボラの歌に歌われる。逆にヤエルと異なり、自発的に神を手助けしなかったルベンやダンは神から激しい非難を受ける。<sup>(14)</sup>神ではなく自己の力への過信、網に犠牲を捧げたカルデヤ人、身の安全を自らの知恵や力のせいにしてたりすることが神の計画への援助を遅らせる。それがシセラとの戦いの際

にルベンを躊躇させた原因でもあった。ルベン同様、神への絶対的な信頼よりは自己の力を信じていたダンが神から離反していたと言わざるえない。神は大きな力を有し、人間が成しえない大きなことを行うことができる。それに比べれば人間は余りにも弱い。しかしその弱い人間でも自ら進んで身を投げ打つことにより神を助けることができる。何よりも神にとって喜ばしいことはそのような無力な人間が進んで神の意志実現に協力を惜しまないということである。それを怠ったのがルベンやダンであった。神への自発的な協力を惜しまず、己を捨てて神にすべてを投げ打つ、それがヤエルであった。ダンは、神が「弱い手段」で大きなことを行ったことへの驚嘆の念をこのように表す。では、なぜ無名の間人が神のために戦うのか。それは、神はこの世における無秩序の状態を嫌うからである。来世での永遠の平和の先駆けとなる現世における平和は来世での平和のためには絶対に不可欠である。

*Peace in this world, is a pretious Earnest, and a faire and lovely Type of the everlasting peace of the world to come: And warre in this world, is a shrewd and fearefull Emblem of the everlasting discord and tumult, and torment of the world to come: And therefore, our Blessed God, blesse us with this externall, and this internall, and make that lead us to an eternall peace.*<sup>(15)</sup>

これは多分に三十年戦争における新旧教徒の戦いにも言及している一節であるが、神は現世における争いごとを好まない。イスラエル人がシセラとの戦いで勝利を収めたのは神が現世での争いを良しとしなかったからである。ダンは、「士師記」5章20節の解釈を(1)神は時間をかけるが最後には神を信じる者を助けてくれる。(2)神ではなくヤエルがイスラエル人の敵のヤピンを殺害した。(3)自発的な神の援助者は永遠に聖書にその名を留められ、逆に神への援助を怠る者は神から非難を受ける、の三点を中心に論を進める。ダンの説教の前半は、言うなれば神の行うことには進んで協力をせよ、との訴えである。それが結果として神からの報いを受け、神の書に永遠のその名を留めることになるのである。

ダンは、説教の序文に付した書簡で「説教の前半、聖書本文の解釈に関して、説教家としての私の職業と良心は、聖霊の意図どおりに私が話したことを十分に保証している」<sup>(16)</sup>と述べている。「士師記」のこれまでの解釈は聴衆が十分理解できるほどの解釈で、何ら問題はない。「士師記」の本文は「奇異で」と評したものもあるが、解釈自体は奇異をてらしたものはない。問題は説教の後半である。上記の書簡でダンは「説教の後半、聖書本文の適応に関しては、それは私が陛下の意図どおりに話したことを十分に保証している」<sup>(17)</sup>と適応に言及している。説教の後半での「適応」は実際どのように行われているか。

### 3

説教の後半は、「士師記」5章20節の「指令」への適応であるとダンは述べているにもかかわらず、期待はずれの感が強い。なぜなら後半ではダンはジェームズ一世を賞賛しつつ「指令」で王が規定した説教の内容と教義問答の重要性、「指令」が新規か否かの問題について論じ、前半の「士師記」解釈と後半における「指令」への適応に関しては満足のいくものとなっていないからである。ジェームズ一世への反「指令」派説教家の抵抗を「世俗的な戦い」ではなく、「霊的な戦い」とし、その戦いの準備は「君主、役人、裁判官、商人」といった人々によるのではなく、イエス・キリストの福音とその説教によって行われること、戦い維持のために神は説教家を「星」としたこと、及び説教家は秩序正しく、「指令」に従って戦わねばならないことが述べられる。<sup>(18)</sup> ジェームズ一世の「指令」が説教家への指令あったことを考えればダンが「指令」論争の中心に説教と説教家を置いたのは当然である。ダンは、シセラを「誤り」と解釈し、その誤りと戦うのが説教家であるとする。<sup>(19)</sup> この「誤り」とは「指令」に異論を唱える説教家の「誤り」である。ダンは、「指令」を支持する説教家をキリスト、「真理」、「誠実」と評し、「指令」に反対する説教家を「悪魔」、「虚偽」、「偶像崇拜」とし、ジェームズ一世に従う者は絶対的に正しいことを示唆する。「指令」論争はいわば「内乱」であり、「反乱」でもある。「指令」に対する賛否両論者は和解はできないと悲観的な見解をダンは述べるが、「指令」反対者に対



してダンは妥協を許さない。「指令」論争は「神の言葉」と「人間の意志」との間の戦いでもあり、ジェームズ一世の「指令」は神の言葉にも匹敵すると言い、ジェームズ一世への賞賛を忘れることはない。和解できない事において平和を申し入れることには断固として拒否すべきであり、そのような者への戦いを神をあおっているという。<sup>(20)</sup>「指令」論争には神から援助がある。これほどの王への援護はない。ダンは、更に「指令」論争における神からの布告は説教である、と言う。説教の後半でダンは説教の重要性を幾度も指摘する。

Preaching then being *Gods Ordinance*, to beget Faith, to take away preaching, were to disarm *God*, and to quench the spirit; for by that *Ordinance*, he fights from heaven.<sup>(21)</sup>

説教は信仰を生むための神の布告である。説教を奪い去ることは神から武器を奪い、霊を消すことであり、説教なくして人々を神へと向けることはできない。説教と信仰は不可分の関係にあり、信仰は説教から生み出される。だからダンはパウロの「もし福音を宣べ伝えないなら、わたしは災いである」をわざわざ援用し<sup>(22)</sup>、説教がキリスト教にとっていかに重要なものであるかを説くのである。ジェームズ一世は確かに説教家に対し、様々な制限を付与していたが、それは決して説教家に説教を禁止したのではない。説教家が扱うべき内容は39箇条と2巻の公認説教集に記されており、それを説教すればよいのである。「指令」は、言論自由の剥奪と批判されるが、ジェームズ一世からすれば説教家は本来は国の政治問題に干渉すべきでない。説教家には説教家にふさわし任務があり、それにこそ説教家は専念すべきなのである。ダンがパウロに大きな関心を寄せるのはパウロが異教徒にキリストによる救済を説いているからに他ならない。説教家が本来の務めを果たす限りにおいて説教家は説教を行うことができる。

But God hath plac'd us in a *Church*, and under a *Head of the Church*, where none are silenc'd, nor discountenanc'd, if being *starrs*, called to the *Ministry of the Gospell*, and appointed to *fight*, to preach there, they fight within the discipline and limits of

this Text,....containing themselves in Order.<sup>(23)</sup>

「士師記」5章20節解釈としてダンが挙げた中に「靈的な戦い」の準備として「イエス・キリストの福音」と説教家の秩序正しい「指令」に従った戦いがあったが、上の引用においてもダンは「秩序正しく、自制する範囲で戦う限り、誰も沈黙させられることはない」と言う。ジェームズ一世の「指令」通りに行動することは秩序を守ることであり、そのときには説教家は声を大にして説教を行うことができる。ダンはしきりに「秩序正しく、整然と」という表現を使うが、それは説教家のジェームズ一世の「指令」への服従を示している。王の「指令」に従わない説教家は社会に混乱を起こす限りにおいて「秩序正しく、整然と」行動しているとは言えない。ダンはあくまでもジェームズ一世への服従によってイギリスの秩序は維持されると考える。秩序の重要性を訴え、秩序のない説教は暴徒と化した軍隊と同じで、良きキリスト教徒の教化に資することはない。<sup>(24)</sup> また秩序正しい説教がないと信仰はいいかげんになるとも言う。<sup>(25)</sup> ダンは幾度も「秩序正しい、整然とした説教」を強調するが、それは説教家の社会的影響力を考えてのことである。この「秩序正しい、整然とした説教」も実は「指令」と密接に関わる重要な問題点であった。「指令」の第一の目的は説教家の「指令」遵守である。その遵守なくしてイギリス社会の秩序はありえない。だから「疑い深く、猜疑心をもって」説教する者は身を引かねばならないのである。<sup>(26)</sup> ダンはここで神と教会によって秩序がもたらされると考える。森羅万象に秩序をもたらしたのは神である。「秩序正しい、整然とした説教」を行わない説教家は神の秩序への破壊をもたらす。神がマクロ的な秩序創造者であるとするならば、ミクロ的な秩序創造者は教会である。そしてそのミクロ的秩序創造者の長がイギリスの場合は "the Royall and religious Head of these Churches"<sup>(27)</sup> たるジェームズ一世である。政治・宗教の長たるジェームズ一世への服従は神の秩序を守ることを意味する。説教家は王を批判することによってではなく、王の「指令」を遵守することによって国家の安定に大きな寄与ができる。絶対王権に固執する王にとって王への不服従は考えられない。説教におけるダンの王擁護の姿勢はこれで終わるのではない。次ぎに王が発した「指令」は新規の

「指令」であるのかの論と「指令」の条項擁護へ論が移っていく。

## 4

「指令」擁護の第二点は、「指令」が歴史上類を見ない新規な「指令」であるのかということである。ダンは、ジェームズ一世が1607年に忠誓の誓いを発したときにも、忠誓の誓いは新しいものではなく、過去に先例があったと言っていたが、「指令」擁護の場合も同様な論法を使用し、「指令」には前例があると主張する。ダンはカール大帝の令集がジェームズ一世の場合に適応できるという。<sup>(28)</sup>カール大帝は説教家が主の祈りを説教すること及び説教家は自分の見解を述べてはならないように令集で規定している。あるいはエリザベス女王に関しても、女王は説教家が教義問題に干渉することことに反対したが、それは女王が自らを "Judge of the Doctrines" としたのではなく、以前に宣言されていないものは何も国教会の主義や教義と宣言されるべきではないと考えていたからである。<sup>(29)</sup>ジェームズ一世が行ったこと同じことをエリザベス女王は行っており、王の「指令」には前例がある<sup>(30)</sup>。ジェームズ一世は、ユダヤの諸王、キリスト教皇帝、イギリスの諸王、エリザベス女王の先例に従っているだけで、何ら新しいことは行っていない。ジェームズ一世は説教をキリスト教初期の時代に説教方法に近づけているにすぎない。ダンは、「指令」でジェームズ一世は過去の中に同様の例を見だし、それによってジェームズ一世の「指令」を擁護する。「指令」は国の平和、秩序が乱される場合には当然の指令であって、ジェームズ一世には何も責められるべきものはない。ジェームズ一世は「いかにして説教家は聖職者としての彼らの任務において振る舞うべきか」を説教家に要求しているだけである。では、説教家の本来の任務とは何か。それは救済の神であるキリストの福音を人々に説教することである。説教は救済に関する事を人々に知らせることである。とすれば説教家が国事に干渉することは説教家の本来の任務を著しく逸脱した行為と言えよう。ジェームズ一世の「指令」を擁護するダンはこのように説教家は本来の任務に専念すべきだと述べる。

To soare in poynts too deep, To muster up their owne Reading, To display their owne Wit, or Ignorance in meddling with Civill matter, or...in rude and undecent reviling of persons: this is that which hath drawen downe his Majesties peircing Eye to see it, and his Royall care to correct it.<sup>(31)</sup>

この一節は「指令」第3条、4条を念頭においている。説教家が非常に難解な宗教問題で一般人からかけ離れたり、学識を集め、機知を誇示し、または国事への干渉や個人への無礼な、慎みのないのしりのなかで無知を表したりする場合は王はそれを改めるのである。これらはみな説教家が本来行うべき道からかけ離れたことがらであり、「指令」でジェームズ一世が言及していたことである。ジェームズ一世からすれば説教家は、救済に必要な知識の源泉である教義問答集、39箇条、2巻の公認説教集に専念しさえすればよいのである。これらのうち教義問答の奨励についてダンはそれには先例があると述べる。Origen, Augustine, Athanasius, Chrysostom等の原始教会、あるいは16世紀のイエズイットも教義問答の重要性を指摘し、それを実践している。あるイエズイットは「我々イエズイットは教義問答を我らの職業とする」とか「キリスト自身の説教は教義問答であった」とさえ言っている。またローマカトリック教会ですらトレント公会議で「日曜日と休日に説教家は午前には説教を午後には教義問答をすべきである」と明記している。英国国教会の場合は「祈祷書」のなかの教義問答がジェームズ一世の言う教義問答に該当するが、教義問答のそもそもの目的はキリスト教についての初歩的な知識の教えである。キリスト教徒に最も必要なのは救済である。その基盤が教義問答にある。しかし我々は教義問答に満足してはいけない。

キリスト教の必要な知識の基盤が教義問答にあるとすればその「拡張」は39箇条にある。ジェームズ一世は「指令」の第1条で説教家が扱う内容を39箇条と2巻の公認説教集と規定していたが、ジェームズ一世の指令にそってダンは39箇条に言及する。なぜ39箇条が説教家の扱う内容にふさわしいのか。それがキリスト教への理解と有能な人のキリスト教への熱意を「高く」、「深く」進めてくれるからである。39箇条の正しい理解はまた、英国国教会以外の宗教の誤

謬を是正する。説教の内容が39箇条に制限されたことは説教内容の減少をもたらすのではなく、逆に「イギリス国民がプロテスタント宗教すべての項目において鍛えられる」のである。

キリスト教の基盤が教義問答にあり、その進展と拡張は39箇条にあり、そして聴衆へのその適応は2巻の公認説教集にある。たとえば39箇条第6条は「救いのために聖書は充満であることについて」であり、聖書には救いに必要なすべてが書かれているとダンと言う。公認説教集第1巻1条は「聖書を読むことへの有益な勧め」であり、そこでもやはり聖書の救いに関しての充満性が書かれているが、39箇条よりはより詳細に書かれ、「聖書には我々が何をなすべきか、何を避けるべきか、何を信すべきか、何を愛すべきか、そして神の手から何を捜すべきかが十分に含まれている。」<sup>(32)</sup> 39箇条の一節よりはるかに詳細に説明がなされている。ダンは、「適応」と言っているが、39箇条の詳細なる説明と言ったほうが理解しやすい。ダンによればそれはたぶん聖書を軽視したローマカトリック教会に対する意図もあった。ダンの反ローマ的態度は偶像崇拜についても言えよう。公認説教集第2巻第2条に「偶像崇拜の危険に対して」があるが、これについては39箇条ではただ公認説教集第2巻第2条に触れているだけで、詳しく述べてはいない。ところが公認説教集第2巻第2条では三部に分けて偶像崇拜の危険について説明している。39箇条での簡単な項目が公認説教集では詳細な説明となっており、それ故にジェームズ一世は公認説教集の重要性を指摘し、説教家に対してそれを扱うように指示するのである。

ジェームズ一世が特に強調した教義問答、39箇条、公認説教集にはキリスト教徒が学ぶべき事項が記されている。キリスト教徒にとっていかにして神から救済されるかが究極の目標となる。それが上記三書に記されており、それを一般人に説くのが説教家の務めである。ジェームズ一世が「指令」で説教家へ指令した内容そのままをダンは説教後半で取り扱い、それを擁護する。「指令」は、キリスト教徒として純粋な心情の現れであったとジェームズ一世は確信していた。だからジェームズ一世は、「正当な理由のある「指令」は絶対的な服従により受け入れられるだろう」<sup>(33)</sup>と明言しているのである。ところが「指令」が公布されるや、国内では「指令」を歪曲する者が現れた。彼らは「指令」は、

説教の実践を制限し、その数を減らし、無知や盲信へ風穴を開けるとして「指令」を批判した。また、説教の実践に関しても、無礼な、不適當な個人への中傷がないかぎり、むしろ王は推奨しているので、説教実践への批判は正しいとは言えない。むしろ「指令」は「神の真理に対する王の変わらざる熱意の意味深い証拠」<sup>(34)</sup>である。説教の実践や説教数減少への批判に対して、ジェームズ一世は「内容のある説教」や「思慮深く宗教心に富む説教家」<sup>(35)</sup>を阻止したり、説教を減らしたりしたことは決してなかったという。むしろ「指令」のおかげで教義問答が増えるのである。だから「指令」によって説教の減少は生ぜず、逆に有益な説教や一般人の教化へ説教家を差し向けることになるのである。

ダンは「指令」の条項のうち、教義問答の奨励、複雑な教義取り扱い禁止、カトリック教徒とピューリタンへの非難禁止を取り上げて「指令」を支持し、ジェームズ一世を擁護する姿勢をはっきりと示している。「指令」の他の条項、日曜日の午後の説教禁止 王の絶対性 説教家の厳しい認可についてダンは触れてはいない。ジェームズ一世としては「王の絶対性」については是非論じてもらいたかったに違いないが、どういうわけかダンはそれには言及しない。ダンは説教の序文でバッキンガム侯爵ジョージなる人物への献呈書簡で説教の前半は聖書本文の解釈、後半では聖書本文の適応を論ずると明言している。<sup>(36)</sup> 説教の前半での「士師記5章20節」の解釈に関しては本論でも論じたようにダンは充分すぎるほど「解釈」にスペースを割いている。しかし後半の「適応」については十分とは言えない。ダンの説教の構成は(1)聖書テキスト解釈(2)「説教家への指令」条項の部分的擁護であり、「適応」に関してダンは「士師記5章20節」の「指令」への適応は行っていないことが理解できる。

## 5

なぜ聴衆はダンの説教に満足感を示さなかったのか。聴衆の不満もダン自身の不満も実は聖書の「指令」への適応の不十分さにあったと考えることができる。ダンが特別な事態を扱った説教での聖書の事態への適応は、例えば、ヴァージニア植民説教や火薬陰謀記念説教においても、非常に適切で説得力あ

る適応となっている。聴衆の感情を最高に盛り上げるレトリックをダンはわきまえていた。ところが「指令」説教では、ダンのトーンはそれほどヴォルテージは上がらない。ということはダン自身の「指令」への関心がそれほど強くはなかったとの印象を受けざるをえない。ダンはジェームズ一世の政策に完全に賛成の意思を示してはいないのでないか。ダンは王からの要請を受けて説教を行ったが、彼は本心から「指令」を擁護する気にはなれなかったのではないか。そのようなダンの熱意のなさが「指令」説教に現れていると考えることができよう。英国国教会の説教家がジェームズ一世に反旗を翻すことは許されない。説教家は自分の意志に反しながらもジェームズ一世擁護の説教を行わなければならないときがある。それがダンの「指令」説教であった。説教家の中にはジェームズ一世に媚へつらい、自己の信念とは裏腹の説教を行い、ジェームズ一世から歓心を買おうとした説教家もいたであろう。ダンの場合、露骨なジェームズ一世への媚へつらいとまではいかない。セントポールズクロスに集まった聴衆から不満を買い、ダン自身にも満足した話しぶりではなかったという報告は何よりも説教前半での「士師記」解釈と後半における「適応」との間のアンバランスのためであった。

ダンは、「士師記」の解釈として、「もろもろの星」を「説教家」、シセラを「誤り」、シセラとの戦いを「霊的な戦い」であるとした。その戦いではキリストの福音と説教が武器であること、そして説教家は「秩序正しく」戦わねばならない、と説いた。確かにダンは「指令」の条項を取り上げ王を擁護している。しかし、聴衆が聞きたかったのはいかにしてダンが聖書の本文を「特殊な事態」に適応するかであって、いわば聖書を盾にした「指令」の擁護を聞きたかったのである。何か事態があるとその先例を聖書に求め、聖書からそれを正当化する。その説教方法は聴衆に安堵感を与える。説教のもつ意義はそこにあった。ところがダンは、「指令」擁護に際し、その適応を実践しない。なぜダンはストレートに聖書の適応を考えなかったのか。前半でのダンの解釈からすれば、神ーヤエルーシセラ、ルベンとダン、そしてより広いコンテクストではイスラエル人とカナン人、という図式が浮かび上がってくる。神の選民であるイスラエル人と敵対するカナン人、シセラを殺害することによりイスラエルをカナン人

から解放したヤエル、神に協力しなかったルベンとダン、これらが「指令」に  
適応されればどうなるか。神－ヤエル－シセラはジェームズ一世－ジェームズ  
一世擁護説教家－反ジェームズ一世説教家となり、ルベンとダンも反ジェーム  
ズ一世説教家となるし、イスラエルとカナン人もイギリスと反ジェームズ一世  
説教家となる。また、「士師記」の解釈で挙げた(1)神は時間をかけるが最後には  
神を信じる者に神は援助の手を差し伸べる。(2)神ではなくヤエルがイスラエル  
人の敵のヤビンを殺害した。(3)自ら進んで神を援助する。(4)自発的な神の援助  
者は永遠に聖書にその名を留められ、逆に神への援助を怠る者は神から非難を  
受ける。(5)人は神の見えないところに行くことはできず、神はいかなることを  
も見ており、神を援助した者には絶えず神からの報いがある、からは「士師記」  
での神の行為がジェームズ一世の「指令」における行為に適応される。ヤエル  
のシセラ殺害が「指令」論争での賛成・反対説教家の論争に重ねられてくる。  
ヤエルが行った神への自発的な協力、己を捨ててまで神へすべてを投げ打った  
ヤエルは「指令」に適応されればどうなるかは一目瞭然である。しかしあえて  
ダンはそれを行わない。ダンは「適応」を全く行っていないかというところでは  
なく、説教の終わり近くでほんの少しだけ「適応」を行ってはいる。ダンは、  
セントポールズクロスに集まった聴衆に対してではなく、説教家に対して呼び  
かける。「士師記」5章20節「もろもろの星は天から戦いに加わり、その軌道か  
らシセラと戦った」の中の「もろもろの星」を「教会の説教家」とし、説教家  
のなかには王に従わない者もいたと言っ、そのような説教家を批判する。聴  
衆からすれば、「もろもろの星」がジェームズ一世を擁護する説教家であるとす  
れば「戦い」とはジェームズ一世とジェームズ一世の「指令」を批判する説教  
家との戦いとなる。そして「シセラ」はそのようなジェームズ一世の「指令」  
を批判する説教家であることは容易に理解できる。ところがダンは説教の展開  
に際し、この適応を徹底的に行おうとはしない。ダンは「士師記」5章20節を  
以下のように解釈した。(1)戦いは「世俗的な戦い」ではなく、「霊的な戦い」で  
ある。(2)「霊的な戦い」の準備として考えられるのは "Princes, Officers, Judges,  
Merchants" といった人々ではなく、イエス・キリストの福音とその説教である。  
(3)この戦いの維持のために神は説教家を星とした。(4)説教家は秩序正しく、



「指令」に従って戦わねばならない。<sup>(37)</sup>以上の解釈を行いながらもダンは詳細に「士師記」を「指令」問題に適應しない。「靈的な戦い」での戦士は「イエス・キリストの福音とその説教」であるとか「もろもろの星」を「説教家」と解釈したり、説教家の「指令」に従っての戦いとかダンは「士師記」の「指令」への「適應」を聴衆に示唆しておきながら、それをはっきりと「指令」に適應しない。聖書の權威が揺るぎつつあった時代にあっても依然として聖書はその權威を保っている。神の書である聖書からの援護を基にジェームズ一世の「指令」に反旗を翻す説教家を論破し、聴衆を納得せしめせるには何と言っても聖書は代わるものはない。聖書を盾に相手反撃を加えることは当時の説教の常套手段であった。それを十分に知りつつも聖書の「指令」への適應に関しては中途半端の印象はぬぐいされない。ダンは、シセラとイスラエル人の戦い、ヤエルとシセラの関係がジェームズ一世擁護派説教家と反ジェームズ一世説教家との戦いであることをより明確にし、その適應を更に展開すべきだった。そして説教家の果たすべき任務について論ずるべきであった。人々を天国に向けさせるのは説教家であり、現世にはない。星を説教家にたとえながら、ダンは次のように言う。

...that starre by which wee saile, and make great voyages, is none of the starres of the greatest magnitude; but it is none of the least neither; but a middle starre. <sup>(38)</sup>

この一節は天の星を仰ぎながらの航海を反ジェームズ一世派の説教家との争いにたとえているのであるが、航海に際し依拠すべき星は最光度の星でもないし、最小の光度の星でもない、中間の星である、とダンは言う。この意味するところはジェームズ一世を擁護する説教家は普通の説教家であるということである。普通の説教家がジェームズ一世の「指令」擁護の戦いに加わればよいのである。ちょうど名もない女性ヤエルが神に加担し、ヤビンを殺害したように、普通の説教家が「指令」論争に加わればよいのである。神の聖なる人である説教家には星と星の間に栄光の差があるのと同様に違いがあるのは当然であ

るが、説教家の任務が何かと言えばそれは「人間の利益」に貢献することである。説教家の目的は「人々の救済を助長する」ことである。魂の救済を説教家の本務に挙げるダンにとって、ジェームズ一世の「指令」を全面的に支持することには何か違和感があったに違いない。ダンの意図からすればジェームズ一世からの依頼による「指令」擁護の説教では、「指令」擁護は至上命令である。確かに所々ジェームズ一世へのお世辞とも取れる賛辞が見られることは確かであるが、それにしても説教終了後の聴衆の印象は良くない。何にもまして説教を行ったダン自身が満足していた感が弱かったとのコメントもある。それでもジェームズ一世はダンの説教の印刷を命じ、説教は出版されることとなった。ダンの説教では説教直後に出版された最初の説教であった。これはジェームズ一世がダンの説教に対して非常に満足していた証拠である。実際ジェームズ一世は、ダンの説教について「ダンの説教は追加や縮小を認めることができないほど完璧な説教である」<sup>(39)</sup>と賞賛したほどであったから、王自身の満足がいかなるものであったかは容易に察しがつく。しかしながらそれでも依然としてダンの説教には疑問が残る。なぜ前半の「士師記」5章20節を「指令」に適応しなかったのか。この疑問に対する答えは説教家の本来の任務は何であるのかということである。ダンは他の説教で幾度となく説教家の任務について論じている。例えばある説教では「ヨハネ伝」1章8節を説教のテーマにあげ、3人の証人の関係を論じている。それによれば3人は、神の恩寵の証人であるキリスト、キリストの使命の証人である洗礼者ヨハネ、及び教会に証言する信仰の証人と媒介者である説教家である。<sup>(40)</sup>あるいは「説教家への指令」擁護説教後の1622年10月13日の説教では神の使い手である説教家は世俗的な指令よりは神の指令に従わねばならないと延べ、説教家の任務は我々自身ではなくイエス・キリストについて説教することははっきりと述べている。霊的な目的のない俗的な目的を推進することではなくキリスト教王国の平和を促進すること、そこにこそ説教家の本来の任務があると言う。説教家はイエス・キリスト、十字架上のキリストについて説教をするのであり、福音の代わりに他のことを説教する者は誰でもが呪われよ、と強い口調でダンは述べる。ダンにとって説教家の任務は世俗的な事柄にはない。あくまでも十字架上で死んだキリストの福音を広め

ることこそその本務がある。このようなダンの説教家観を考慮すれば「指令」擁護のダンの態度は自ずから明らかになってくる。ダンは「指令」について説教することにはあまり乗り気ではなかった。ダンは、「指令」自体が極めて政治色の強い指令であったことを見抜いていた。「指令」のなかからダンがジェームズ一世擁護として選んだ「指令」第1条の教義問答、39箇条、公認説教集はダンがそれほど異を唱えるほどでもなかった。だからダンはそれらを取り上げ、「指令」を擁護した。しかし、「指令」第2条から6条までの日曜日の午後の説教禁止、難解な教義の取り扱い禁止、王の絶対性、カトリック教徒やピューリタンへの避難禁止及び説教家の認可問題、これらはダンの説教家としての任務の範囲外であった。ダンはジェームズ一世の「指令」には全面的に賛同できなかった。それでもジェームズ一世からの要請から「指令」を擁護しなければならない。そこにダンの苦渋があった。その苦渋が説教終了後ダン自身は満足しなかったかのように話したとか、また、聴衆をも満足させなかったとの印象を与えたのである。Nancy E. Wright は、ダンが説教に選んだ「士師記」5章20節は「あいまいで」「まれ」であり、ダンは説教で自らの態度を「あいまいに」していると述べている。<sup>(41)</sup>確かにダンの説教は歯切れが悪い。ダンの説教の目的は「指令」における王の意図について聴衆を説得し、ダンの説教が以後の他の説教家にとって一つの規範となることであったことを考えれば<sup>(42)</sup>、果たしてダンが説教の目的を十分に果たし終えたかは疑問である。「指令」を擁護し、ジェームズ一世の歡心を買うことに専念しようと思えばもっと他の聖書の一節の選択もあった。そして、その一節を「指令」にうまく適応し、聴衆をもそして何より王をも喜ばせることもできたはずである。ところがダンは「奇妙な」聖書の一節を選び、その解釈に時間を割き、適応に関してはそれを意図的に避けた。ところどころで「指令」に沿った発言をしているが、それも十分であるとは言えない。ところが不思議なことにジェームズ一世はダンの説教にいたく満足した。王の満足感に偽りはなかったのか。自分が選んだ説教家に労をねぎらう単なるお世辞としての満足感だったのか。1622年には既に述べたようにジェームズ一世の娘エリザベスのボヘミアでの敗北があり、そして何よりも息子チャールズのスペイン王女との結婚話が国中を飛び交い、ジェームズ一世は

カトリック教徒に改宗するのではないかとのうわさが流れるほどであった。カトリック教の大国スペインとの政略結婚を通してイギリスをより安定した国へ導こうとのジェームズ一世の計画は失敗に帰したが、「指令」擁護の説教を行った1622年9月15日にはジェームズ一世はスペイン王女と息子の結婚にまだ本気になっていた。ジェームズ一世が「指令」の前に国内のカトリック教徒を釈放したのは息子のスペイン王女との結婚においてスペインに好印象を与えたかったからに他ならない。そのような事態の中でジェームズ一世がダンに「指令」擁護の説教を依頼した真の意図は何であったのか。Shamiは、ジェームズ一世がダンを選んだのはダンが「教義的にも修辭的にも満足のいく説教家」であると述べ、「(ジェームズ一世がダンに) 党派に左右されない見解を維持させたり、より危険なことであるが、他人に影響を及ぼすほどの沈黙を維持させたりするより公務にダンを導き入れるようとしていたことはありうることである」と言っている。<sup>(43)</sup> また、Shamiは、ダンがジェームズ一世の要請を受けて「指令」擁護の説教を行ったのはダンに野心があったからではないか推測している。ジェームズ一世は説教家としてのダンの有能振りを見たと同時にまたダンの「指令」への態度を見抜いていたのかもしれない。とすればことのほか説教を好んだジェームズ一世の説教を理解する能力及び説教家の心理を読みとる眼力は驚きである。言葉を変えて言えば自分に都合良く説教家を利用するしたたかさと言ってもいいだろう。ジェームズ一世に請われたダンも説教家として「指令」擁護という任務だけは果たした。しかしそれは単なる任務の遂行であって、心底からの任務とは言えない。ダンは1622年11月の火薬陰謀記念説教後論争説教への熱意を失い、その説教はキリスト教に関する説教がほとんどを占めていく。<sup>(44)</sup> それと同時に王からの呼び声も以後少なくなっていく。「王の代理人」としてのダンのイメージに異議を唱えたいとなると Shami は言う。<sup>(45)</sup> 「指令」支持の説教により、ダンはジェームズ一世から賞賛されたとは言え、その説教は他の王を擁護した説教と比べると「指令」への彼自身の態度が曖昧なままで終わった感が強い。聖書の「指令」への適応がうまくいけば、ダンの説教は成功したであろう。ダンの説教はそれまでの説教の手順を守らなかったがゆえに、聴衆の期待を裏切る結果となったのである。説教から9日後ダンは友人に

あてた書簡のなかで「人々はようやく神と王の道を信じることを学んだ」と書き、ダン自身の説教が人々に与えた影響について言及している。ダン自身の言葉は Chamberlain のダンの説教に対する印象とは異なっている。<sup>(46)</sup> ダン自身は自らの説教に自信を抱いていたが、第三者からの印象は異なっていた。ダンの説教への評価がどうであれ、ダンはややジェームズ一世に対してまたイギリス国民に対してあいまいな態度を取ることは出来なくなったが、政争に関する説教は激変していく。御用説教家と言われた Lancelot Andrewes は出世の階段を駆け上っていったが、ダン自身はセント・ポール大聖堂の主席司祭が精一杯であった。王の歓心を買うためにひたすら追従的態度を示すことを嫌ったダンの姿が「指令」支持の説教にも現れている。「指令」支持説教は、ジェームズ一世とダンとの以後の関係及び以後の説教家としてのダンに少なからざる影響を及ぼした説教でもあった。

## 注

- (1) Directions for Preachers については、Neil Rhodes, Jennifer Richards and Joseph Marshall eds.: *King James VI and I Selected Writings* (Ashgate, 2003), pp.382-384 を参照。本論では以下「指令」と略記する。ダンの説教については George R. Potter and Evelyn M. Simpson eds.: *The Sermons of John Donne* (University of California Press, 1959), Vol.IV, pp.178-209 を使用する。
- (2) C.S. Clegg: *Press Censorship in Jacobean England* (Cambridge University Press, 2001), p.164.
- (3) Clegg, p. 165.
- (4) Clegg, p. 162.
- (5) Kenneth Fincham and Peter Lake, "The Ecclesiastical Policy of King James I", *Journal of British Studies* 24(1985), pp. 198-9.
- (6) Potter and Simon, p. 187.
- (7) Potter and Simpson, p. 189.
- (8) Potter and Simpson, p. 184.
- (9) Potter and Simpson, p. 184.

- (10) Potter and Simpson, p. 180.
- (11) Potter and Simpson, pp. 181-2.
- (12) Potter and Simpson, p. 186.
- (13) Potter and Simpson, p. 188.
- (14) Potter and Simpson, p. 191.
- (15) Potter and Simpson, pp. 182-3.
- (16) Potter and Simpson, p. 178.
- (17) Potter and Simpson, p. 178-9.
- (18) Potter and Simpson, p. 192.
- (19) Potter and Simpson, pp. 195.
- (20) Potter and Simpson, p. 194.
- (21) Potter and Simpson, p. 195.
- (22) Potter and Simpson, p. 194.
- (23) Potter and Simpson, p. 196.
- (24) Potter and Simpson, p. 192.
- (25) Potter and Simpson, pp. 197.
- (26) Potter and Simpson, p. 197.
- (27) Potter and Simpson, p. 199.
- (28) Potter and Simpson, pp. 199-200.
- (29) Potter and Simpson, p. 200.
- (30) Potter and Simpson, p. 201.
- (31) Potter and Simpson, p. 202.
- (32) *The Homilies* (Focus Christian Ministeries Trust, East Sussex, 1986), p. 1.
- (33) Potter and Simpson, p. 207.
- (34) Potter and Simpson, p. 208.
- (35) Potter and Simpson, p. 208.
- (36) Potter and Simpson, pp. 178-9.
- (37) Potter and Simpson, p. 192.
- (38) Potter and Simpson, p. 209.
- (39) R. C. Bald: *John Donne A Life* (Oxford: At the Clarendon Press, 1970), p. 435.
- (40) Nancy E. wright, "The *Figura* of the Martyr in Donne's Sermons", *ELH*, 56.2(1984), p. 301.

- (41) Wright, p. 302.
- (42) Jeanne Shami: *John Donne and Conformity in Christ in the Late Jacobean Pulpit* (D. S. Brewer: Cambridge, 2003), p. 110. 本書と Shami の "The Stars in their Order Fought Against Sisera": John Donne and the Pulpit Crisis of 1622", *John Donne Journal* 14(1995), pp. 1-58 には教えられるところが多かった。
- (43) Shami, p. 138.
- (44) Shami, p. 138.
- (45) Shami, p. 138.
- (46) Elizabeth Thomson ed.: *The Chamberlain Letters* (John Murray, 1965), p. 291. 小論のサブタイトルは Chamberlain の1622年9月22日の書簡である。